

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 25 日現在

機関番号：37111

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：22720121

研究課題名（和文） 19 世紀後半のアメリカにおける身体的・精神的障害表象の多面性

研究課題名（英文） Multi-faceted representation of physical and mental disabilities in the late nineteenth century America

研究代表者

秋好 礼子（AKIYOSHI REIKO）

福岡大学・人文学部・准教授

研究者番号：20331910

研究成果の概要（和文）：

19 世紀後半の人気児童小説家の作品において、先天的障害表象と後天的障害表象の使い分けがされている傾向があることがわかった。また、同時代の文学作品や定期刊行物を調べた結果、19 世紀半ばはセンチメンタルな障害表象が多かったが、世紀末に近づくにつれ、「ノーマル」と「アブノーマル」の境界が曖昧であることの描写も見られることがわかった。

研究成果の概要（英文）：

By this research, it was found that some popular children's literature authors tend to use acquired disability and congenital one differently in their works written in the latter half of the nineteenth century. Another research whose focus was put on the literature and periodical publication after the Civil War shows that the boundaries between "normal" body and "abnormal" body became blurred in those publications as the nineteenth century comes to a close while the past research found mainly sentimental descriptions of disability or disabled people in those publication of the middle nineteenth century.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学 英米・英語圏文学

キーワード：障害、19 世紀後半

1. 研究開始当初の背景

日本で「バリアフリー」が声高に言われるようになった頃、筆者は前任校で介護福祉士を養成する学科に所属し、様々な福祉施設を訪問させていただく機会を得たが、この時の

経験が、人の内的な考え方における「バリアフリー」とは何かについて考えるきっかけとなった。当時この言葉は、階段のみで上り下りしなければならない建物にエレベーターを設置したり、室内や町中の段差をなくすな

どという、物理的な意味で使われることが多かった。今や **disability studies** も盛んになり、精神的・非可視的「バリア」についても議論・研究が進んでいるが、先進国の中で、日本は遅れているように思われる。

筆者が研究対象としている、19 世紀中・後期のアメリカは、身体的・精神的障害についての議論が高まった時代であり、この問題が、一般市民の読み物の中でどう取り扱われていたかの研究は意義があると考え。文学の世界で、差異やアイデンティティーといった問題は、ジェンダー、人種、民族などの構造の中では既によく論じられてきたものの、身体的・精神的他者性についてはまだ議論の余地がある。文学を専門外とする当時の学生たちに対しても、何等かの形で貢献できると考え、本研究に着手するに至ったが、研究対象が広範囲に及ぶため、現在もその研究を続けている。

科研費を受給して進めたこれまでの調査は、主に 19 世紀半ばの文献を対象にしていたが、女性作家が台頭するにつれて、また、女性の社会進出が広がるにつれて、「障害」にまつわるレトリックも変化したと考え、今回は、調査対象を前調査に続く時代の文献とし、その変化を考察することを目標とした。

また、筆者の現在の勤務校は、医学部医学科、看護学科、スポーツ科学部を擁し、身体に関する勉強をしている学生が少なくないため、集めた文献を図書館に寄贈することはもちろん、この研究を進めることで、何らかの形で彼らに貢献できたらと考えた。

2. 研究の目的

身体的・精神的障害を表象することのレトリカルな意味での効果は、「ノーマルな」（時代、個人・集団、文化などによって定義が様々なに変化するため、括弧を付す）立場にいる者とそうではない立場を与えられた者の社会的関係に由来する。これまでの研究は、19 世紀半ばに焦点を当てていたが、本研究はそれを引き継ぎ、主に 19 世紀後半、特に南北戦争後から 20 世紀に入る頃のアメリカの小説や雑誌に焦点を当て、どのような社会的背景や作家の意図のもとに身体表象がなされているか、またそこに障害の形態の違いは関わっているのか、様々なメディアによる表象が、現実より蓋然性に依拠する傾向があるのではないか

など、文字メディアの中の身体表象について、様々な角度から考察することを目的とした。

3. 研究の方法

まずは研究対象を絞ることから始めた。平成22年度は、見た目に明らかな障害についての研究に重点を置いた。まず、研究対象とする19世紀後半のアメリカ小説の時代背景を知るため、1880年代くらいまでに盛んになった体育教育や健康ブーム、労働形態の変化などの社会情勢に関する情報を収集し、当時、健常者に求められていたもの（風潮）について考察、その一方で、施設の設定や教育を含めた障害者に対しての社会的対応について情報収集をした。

また、この作業と同時進行で、障害を持つ人物が描写されている小説を調べるとい、以前から継続して続けている調査をした。以前の調査で、障害の形態としては知覚障害が小説や詩の中で多く使われていることが分かっているが、今回は、例えば四肢の障害など、知覚障害以外の障害形態に注意しつつ、日本ではまだよく知られていない文献の収集をすることも目指した。これまでも、女性作家に注目をしてはいたが、定期刊行物に掲載された小説やエッセイに加え、女性作家が多い児童小説にも目を向けた。

情報収集の具体的な方法としては、日本で入手可能な書籍やインターネットを使って資料となりそうなものを探す他、**Harvard University** の図書館に行き、実際に有効な資料を探した。

平成 23 年度は、南北戦争直後のアメリカにおける様々なメディア（記録、新聞、雑誌、小説など）を調べることで、身体に関する社会的意識について考察すると共に、19 世紀後半に人気を博した女性作家（**Catherine Beecher Stowe** のような女性運動家や教育家を含む）が執筆した小説、エッセイ、手紙などにおける身体表象に特に注目して調査をした。

前年度に引き続き、1880 年代頃までに盛んになった体育教育や健康ブーム、女性教育を調べることを通して、当時、健常者に求められていたもの（風潮）について考察する一方で、南北戦争による負傷者を含めた障害者に対しての社会的対応（施設の設定や教育を含む）について情報収集をした。最終年度であるため、考察する障害の形態については特に限定せず、加齢や病によって“**disabled body**”とみなされる場合、或いは他者からそのように定義されることへの危惧について

調べることも視野に入れた。

資料収集の具体的方法は、前年度と同じく、日本で入手可能な書籍やインターネットを使った他、ハーバード大学の図書館に行き、資料を探した。

4. 研究成果

平成22年度は、19世紀後半の小説や雑誌などの文字媒体における、見た目に明らかな身体障害表象について調査をする予定であったが、学内の役職について会議等が増えたことによる時間の制約のため、特に児童小説と女性作家の作品に焦点を絞って資料を収集することにした。まず、児童小説家として19世紀後半に人気があったJuliana Horatia Ewingや、Dinah Maria Mulock Craikなどの、日本ではあまり知られていない小説に見られる障害表象について調べた結果、本人の不品行ゆえに障害を負うという、懲罰の表象として後天的障害を使っている場合と、身体的には障害を持ち、内面的には美徳の鑑という、過度に内面を美化するために、先天的障害を使っている場合に、大きく分けられることが分かった。これらの表象が、当時の教育やPuritanism、commercialismなどどう関係するかを今後考察する必要があると考える。

Harvard Universityでの資料収集は、上述の理由で当初予定していた渡航期間を短縮せざるを得なかったため、19世紀半ばから19世紀後半に活躍した女性作家のものに限定して資料を探した。具体的には、Harriet Beecher StoweやLouisa May Alcottの小説や南北戦争時の体験を描いたものに加え、彼女たちが家族に宛てた手紙など、私的に書いたものも閲覧し、どのように他者や自分自身の身体に関する記述をしていたかを調べた。その過程で、Louisa May Alcottの父親で、超絶主義者のAmos Bronson Alcottが娘Louisaに宛てた手紙を読むこともできた。同じ超絶主義者のRalph Waldo Emersonの身体に関する記述は、disability studies関連の論文でも度々議論されているので、双方を比較する研究も今後できそうに思われる。

平成23年度は、南北戦争後から19世紀末にかけてのアメリカにおける新聞、雑誌、小説などの文字媒体を調べることで、身体に関する社会的意識について考察すると共に、19世紀後半に人気を博した女性作家（女性運動家や教育家を含む）が執筆した小説、詩、エッセイ、手紙などにおける身体表象に特に注目して調査をする予定であった。しかし、十分な時間が取れなかったため、当時の定期刊行物の他、Louisa May Alcottの南北戦争に関する

著作を中心に資料収集をした。また、Harvard Universityの図書館で資料収集をした際、罹患した身体の風刺画のコレクションを閲覧することができた。

これまでの研究で、*Godey's Lady's Book*など、特に19世紀半ばの女性向けの読み物において、身体に何等かの障害を持っている人物は、同情を誘うような煽情主義的な描かれ方をされることが多いことが分かっているが、今回の調査で、20世紀に近づくほど、その傾向が薄れてくることが分かった。また、*The Atlantic Monthly*や*Harper's Monthly Magazine*などの定期刊行物に掲載された記事や広告において、障害を持つ身体を、異質なものとして排除・隔離する描写から、治療・世話・理解という面からの描写へ移行している傾向が見られた。Louisa May Alcottは、まさに後者の方法を使って、実生活でも執筆活動においても自己実現を図ろうとしているが、*Hospital Sketches*などにおいて、「ノーマル」な身体と「アブノーマル」な身体の境界が曖昧であることを描いていることが分かった。当時の人気女性作家には病に悩んでいた者も少なくないが、そのような作家ほど、現代のDisability Studiesが目指していることの一つに早くも取りかかっていたことが伺え、今後さらに他の著作を研究すべき重要性があると考えられる。

“disability”の問題は、身体的なものに留まらず、政治、社会、経済の分野に及ぶ上、誰しもがそうなる可能性を持つ、遍在的な問題である。それが小説等のメディアを通していかに表象され、時代のレトリックとして人の認識に影響を及ぼしてきたかについての本研究は、今の時代にも関連するもので、有意義と考える。これまで、*Godey's Lady's Book*に見られる障害を持つ子どもの表象について調べたことはあったが、今回、児童小説の分野も若干調べることができたので、さらにこの方面での研究を進めたい。また、予定していたものの調査することができなかったagismとdisabilityの関連も、今後新たに研究対象にしたいと考えている。学務で論文執筆の時間が取れずにいるが、集めた資料を使って、今後研究の成果を発表したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

秋好 礼子 (AKIYOSHI REIKO)

福岡大学・人文学部・准教授

研究者番号：20331910

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：